

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	野口亮
<p>[論文題名]</p> <p>Development of a three-dimensional pre-vascularized scaffold-free contractile cardiac patch for treating heart disease</p> <p>心疾患治療を目的とした、スキャフォールドを用いない拍動し血管網有する3次元心筋構造体の開発</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁-頁, 発行西暦年 The Journal of Heart and Lung Transplantation, Volume 35, Issue 1, P137-145, 2016</p> <p>著者名 <u>Noguchi R.</u>*, Nakayama K., Itoh M., Kamohara K., Furukawa K., Oyama J., Node K., Morita S.</p> <p>[要 旨]</p> <p>【研究の目的】細胞本来が有する細胞凝集現象（スフェロイド）を利用して細胞のみを3次元化させ心不全治療に応用可能な機能的立体心筋組織の構築方法を開発する。</p> <p>【方法】ラット胎児由来心筋細胞、ヒト繊維芽細胞、ヒト血管内皮細胞を一定の比率で混合して、心筋組織型スフェロイドを形成した。3次元化効率、凝集速度、細胞動態、拍動効率などを解析し至適な細胞比率の条件検討を行った。スフェロイドを効率よく融合させ3次元化心筋構造体を構築する技術を開発した。心筋構造体のヌードラットへの移植実験を行い心臓への生着の有無を解析した。</p> <p>【結果】混合比を至適化することで拍動する、血管網を有する指摘心筋組織型スフェロイドの作製に成功し、互いに融合することを確認した。心筋スフェロイドを大量に融合させ半径1cm程度の同期して拍動する3次元心筋構造体の構築に成功した。ラットへの移植実験では内部に血管網を構築し生着することを確認した。</p> <p>【考察】本手法は、外来異物を利用せず、細胞のみの自己凝集能で、心筋細胞を機能的に立体化し、作成した移植片を心臓に生着することができた。本技術は、心臓再生医療のための効率的な細胞移植方法として有効である。</p> <p>【結論】細胞のみで構成される3次元的心筋組織の作製および移植法の開発により、重症心不全に対する次世代型の新規再生医療技術に発展しうると考えられた。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	下村光洋
<p>[論文題名]</p> <p>Acute effects of statin on reduction of angiotensin-like 2 and glyceraldehyde-derived advanced glycation end-products levels in patients with acute myocardial infarction: a message from SAMIT (Statin for Acute Myocardial Infarction Trial)</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Heart and Vessels, 2015 Dec 23. Epub ahead of print</p> <p>著者名 Mitsuhiro Shimomura, Jun-ichi Oyama, Masayoshi Takeuchi, Yoshisato Shibata, Yusuke Yamamoto, Tomohiro Kawasaki, Hiroshi Komoda, Kazuhisa Kodama, Masashi Sakuma, Shigeru Toyoda, Yohei Inoue, Daigo Mine, Masahiro Natsuaki, Aiko Komatsu, Yutaka Hikichi, Sho-ichi Yamagishi, Teruo Inoue, Koichi Node</p> <p>[要 旨]</p> <p>【研究目的】 急性心筋梗塞患者における急性期からのスタチン投与の心保護作用を評価する。</p> <p>【方法】 多施設共同の前向きオープンラベル無作為試験とし、急性心筋梗塞患者を無作為にアトルバスタチン投与群と非投与群に分けた後、速やかに内服し、責任病変に対して経皮的冠動脈形成術を施行。主要評価項目を梗塞サイズと左心機能とし、副次的評価項目を主要有害心脳血管イベントとバイオマーカーとした。</p> <p>【結果】 6か月後の左室駆出分画はアトルバスタチン群で有意にベースラインより改善を認めた。主要有害心脳血管イベントは両群間で差はなかったが、2週間後の Angiotensin-like protein 2 (ANGPTL2) はアトルバスタチン群で有意に増加が抑えられ、2週間後の Toxic advanced glycation end-products (TAGE) はアトルバスタチン群で有意に低下した。</p> <p>【考察】 ANGPTL2 は慢性炎症のマーカーとして認識されてきており、動脈硬化の進行に直接関与していると考えられている。アトルバスタチンによる抗炎症作用や抗酸化作用が ANGPTL2 の増加を抑制し、TAGE を低下させることで、左室駆出分画の改善に関与した可能性がある。</p> <p>【結論】 心筋梗塞発症後早期のアトルバスタチン服用は ANGPTL2 と TAGE 値を低下させており、それに伴う心保護効果を期待しうる。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第	号	氏名	松尾 俊哉
<p>[論文題名]</p> <p>Multifunctionality of PAI-1 in fibrogenesis : Evidence from obstructive nephropathy in PAI-1 overexpressing mice</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁-頁, 発行西暦年 kidney International vol67 2221-2238 2005</p> <p>著者名 Shunya Matsuo, Jesus M. Lopes-Guisa, Xiaohe Cai, Daryl M.Okamura, Charles E Alpers, Roger E.Bumgarner, Mette A. Peters, Guoqiang Zhang, Allison A. Eddy</p> <p>[要 旨]</p> <p>目的: プラスミノゲンアクチベーター阻害因子1 (PAI-1) は、線溶系制御作用とともに炎症反応蛋白としての一面も知られている。慢性腎疾患においては、間質線維化に関与しているとの報告があるが、機序は明らかでない。本研究の目的はその機序の解明である。</p> <p>方法: PAI-1 過剰発現マウス (PAI-1 tg) および野生型マウスの片側尿管閉塞モデル (UUO) モデルを作成し、尿細管閉塞後第3日、7日、14日で両者を比較した。</p> <p>① 線維化の評価: コラーゲン染色であるシリウスレッド染色と線維化の定量的評価であるコラーゲンアッセイ。</p> <p>② PAI-1 の発現の評価: mRNA および蛋白質レベルで、それぞれノーザンブロット解析、ウエスタンブロット解析、免疫染色。</p> <p>③ 筋線維芽細胞およびマクロファージの集積の評価: α SMA 染色と F4/80 染色。</p> <p>④ 線溶系の評価: ウロキナーゼ型プラスミノゲンアクチベーター (uPA) ザイモグラフィ。</p> <p>結果: 線維化の程度は組織学的にも定量的にも PAI-1 tg 群で有意に悪化していた。PAI-1 tg 群ではマクロファージと筋線維芽細胞の集積はより大きく、ウロキナーゼ活性は有意に低下していた。遺伝子マイクロアレイ試験により、線維化や線溶系に関与する一部の遺伝子の亢進および抑制を認めた。</p> <p>結論: PAI-1 にともなう間質線維化の機序として①間質細胞動員に伴う線維化促進因子の影響②線溶系の抑制に伴う細胞外基質のターンオーバーの低下が考えられた。今回の研究から PAI-1 が慢性腎疾患における間質線維化抑制のための有効な治療ターゲットとなる可能性が示唆された。</p>				
<p>備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。</p> <p>2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。</p>				

論文要旨

報告番号 甲・乙	第	号	氏名	江頭 秀哲
<p>[論文題名] Percutaneous high-energy microwave ablation for the treatment of pulmonary tumors: a retrospective single center experience</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁-頁, 発行西暦年 Journal of Vascular and Interventional Radiology 27(4):474-9 2016</p> <p>著者名 Y Egashira, S Singh, S Bandula, R Illing</p> <p>[要 旨]</p> <p>[目的] 肺腫瘍への高エネルギーマイクロ波焼灼療法 (以下、MWA) の安全性と有用性の検討を行うこと</p> <p>[方法] 2012年6月～2014年6月に行われたMWA62回を後方視的に評価を行った。この研究に含まれた患者や腫瘍背景は、44人 (男女比: 21:23、年齢中央値 66) であった。治療対象となった病変は、肉腫の転移 (23人)、結腸直腸癌の転移 (16人)、原発性肺癌 (2人)、食道癌・乳癌・膀胱癌の転移 (それぞれ1人ずつ) であり、対象病変のサイズは中央値で 12 (6-45 mm) であった。手技成功率、局所制御率、合併症などをCTを用いてフォローし検討した。</p> <p>[結果] 経過観察期間の中央値は 15 か月 (6.2-29.5 カ月) であった。手技成功率は 94% であり、局所制御率は 98% (再発は 2/87 結節) であった。合併症としては気胸が 19% に生じた。血痰、感染などの他の合併症は生じていない</p> <p>[考察] 高エネルギーMWAは、1回の治療で治療が終了となることが多く、局所制御率も過去の報告と遜色はなかった。他の焼灼療法 (ラジオ波、低エネルギーマイクロ波、凍結療法) と比較して、高エネルギーMWAは短時間で十分な熱量を確保できることが良好な治療成績を導いたものと考えられた。また、この研究に含まれた患者群は多種多様であり、過去の報告との単純比較はできないが、治療後の生存率も良好であった。</p> <p>[結論] 高エネルギーMWAは安全で、効果的な治療と考える。</p>				

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	藤原 元嗣
<p>[論文題名]</p> <p>The symptoms of gastroesophageal reflux disease correlate with high body mass index, the aspartate aminotransferase/alanine aminotransferase ratio and insulin resistance in Japanese patients with non-alcoholic fatty liver disease.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Internal medicine, 54 巻, 3099-3104 頁, 2015 年</p> <p>著者名 藤原元嗣、江口有一郎、福森則男、江口 仁、朝長元輔、吉岡経明、百武正樹、坂西雄太、京楽 格、杉岡 隆、藤本一眞、草野元康、山下秀一</p> <p>[要 旨]</p> <p>研究の目的：日本において、逆流性食道炎（GERD）の症状と BMI の間に関連があるかどうかは未だ議論が分かれるところである。今回我々は検診受診した健常者の集団と非アルコール性脂肪性肝疾患（NAFLD）と診断されている患者の群で BMI と GERD の症状がどのように関連しているかを評価した。</p> <p>方法：50人の NAFLD 患者と228人の検診受診者において身長、体重、BMI、GERD 症状を表す F スケール、血清中の中性脂肪、ガンマ GTP を比較した。NAFLD 患者群ではさらに AST、ALT、インスリン抵抗性を表す指標である QUICKI を測定した。</p> <p>結果：NAFLD の患者群では F スケールの値が BMI と中等度の相関を示したが、検診受診者群では相関を示さなかった。また NAFLD 患者群において AST/ALT 比と QUICKI スコアは FSSG と負の相関を認めた。さらに、NAFLD 患者群において BMI は F スケールのうち胃酸逆流に関係するスコアと相関を認め、AST/ALT 比と QUICKI スコアは腸管蠕動不全に関係するスコアと負の相関を認めた。</p> <p>結論：日本人の NAFLD 患者において、BMI によって表される肥満は GERD 症状を増悪させる危険因子である。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報 告 番 号 甲 ・ 乙	第 号	氏 名	山本 一道
<p>[論文題名] Long-term survival after video-assisted thoracic surgery lobectomy for primary lung cancer.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 <i>Ann Thorac Surg. 89(2), 353-9, 2010</i></p> <p>著者名 <u>Yamamoto K</u>, Ohsumi A, Kojima F, Imanishi N, Matsuoka K, Ueda M, Miyamoto Y.</p> <p>[要 旨]</p> <p>研究目的 悪性疾患に対する胸腔鏡下肺葉切除 (VATS) は、導入に慎重な意見が存在する。その原因として悪性疾患に対するエビデンスが確定していないことがある。この研究の目的は原発性肺癌に対する VATS の適応および長期成績を検討するものである</p> <p>方法 2000年 5 月から 2003年 12 月までに国立病院機構姫路医療センターにて施行された原発性肺癌に対する肺切除のうち、VATS を予定された 325 例を後ろ向きに検討を加えた。当該病院では初期のラーニングカーブののちすべてのステージの肺癌を適応とした。また長期成績の検討のため、術後 5 年以上経過した症例のみ対象とした。</p> <p>結果 VATS を計画された 325 例のうち、21 例 (6.4%) が開胸術に移行した。術後在院死は一例 (0.3%)。打ち切り症例の平均経過観察時間は 66 ヶ月。全生存および非担癌 5 年生存率はそれぞれ Ia 期 85%、83% (192 例)、Ib 期 69%、64% (50 例)、II 期 48%、37% (27 例)、III 期 29%、19% (50 例) ($p < 0.0001$)。VATS 症例の割合は年ごと、特に 2002 年以降に増加した (前 2 年 50%、後 2 年 80%)。研究期間を通じて長期成績、特に早期肺癌に対するそれはほぼ一定であった。</p> <p>結論 悪性疾患に対する VATS は、実行可能性があり長期成績も開胸手術に遜色なかった。経験を積んだ施設においては VATS は、特に早期癌に t 対しては標準治療となる可能性が示唆された。複数施設によるさらなる検討が必要と考えられる。</p>			
備考 1 論文要旨は、600 字以内にまとめるものとする。			

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	中村 恵
<p>[論文題名]</p> <p>Somatostatin analogue attenuates estrogen-induced augmentation of glomerular injury in spontaneous hypercholesterolemic female Imai rats.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁-頁, 発行西暦年 Nephron, 89, 448-454, 2001</p> <p>著者名 Nakamura M, Ikeda Y, Mine M, Tomiyoshi Y, Sakemi T</p> <p>[要 旨]</p> <p>研究の目的: エストロゲン補充療法 (ERT) は成長ホルモン (GH) 値の上昇に関連して糸球体障害をもたらすことが報告されている。我々は雌の高脂血症自然発症 (SHC) ラットの ERT による GH の上昇と糸球体障害への影響の関係を明白にするために、雌 SHC ラットの ERT による腎障害の増悪が、成長ホルモン分泌阻害剤であるソマトスタチンアナログによって軽減されるかを確認した。</p> <p>方法: コントロールをグループ 1 (Cont, n = 10)、エストロゲン単独投与群 をグループ 2 (Cont-E, n = 10)、エストロゲン+ソマトスタチンの低用量群と高用量群をそれぞれグループ 3 (Cont-E-LS, n = 10) と 4 (Cont-E-HS) とに割り付けした。それぞれ週齢 10 週から 30 週の間 4 週毎に体重、尿蛋白量、血清 ALB, T-CHO, TG, BUN, Cr を測定し、週齢 30 週に形態学的な検討を行った。</p> <p>結果: エストロゲン投与群は、尿蛋白排泄率増加と血清 T-CHO 値の上昇及び成長ホルモンの増加を伴って糸球体障害の増悪を認めた。一方でソマトスタチン追加群では、尿蛋白排泄率および血清 T-CHO 値ともに減少し、成長ホルモンの低下を伴って糸球体障害がコントロールレベルにまで軽減された。</p> <p>結果: この結果から雌 SHC ラットのエストロゲンによる腎障害の増悪には GH 上昇の関与が大きいと考えられた。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	大石光寿
<p>[論文題名]</p> <p>Patterns of failure after postoperative intensity modulated radiotherapy for locally advanced and recurrent head and neck cancer</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Japanese Journal of Clinical Oncology, Epub ahead of print First published online: August 10, 2016, doi: 10.1093/jjco/hyw095</p> <p>著者名 Mitsutoshi Ooishi, Atsushi Motegi, Mitsuhiro Kawashima, Satoko Arahira, Sadamoto Zenda, Naoki Nakamura, Takaki Arij, Sunao Tokumaru, Minoru Sakuraba, Makoto Tahara, Ryuichi Hayashi, Tetsuo Akimoto</p> <p>[要 旨]</p> <p>【目的】 進行・再発頭頸部癌術後に対して強度変調放射線治療(IMRT)を施行した症例の再発形式を遡及的に解析することで術後 IMRT の実施可能性を検討すること。</p> <p>【方法】 対象は2006年3月から2013年12月に頭頸部扁平上皮癌に対して術後 IMRT を施行した122例。原発部位は口腔／中咽頭／下咽頭／喉頭：59／14／31／10例、原発不明8例。76例で化学療法を同時併用した。放射線治療の照射線量中央値は66Gy。</p> <p>【結果】 生存例の追跡期間は25-115ヶ月(中央値；54ヶ月)、3年粗生存率、無増悪生存率、無遠隔転移生存率、局所領域制御率はそれぞれ59%、48%、52.4%、71%であった。32例が局所領域に再発し、照射野内26例、照射野辺縁5例、照射野外7例であった。辺縁再発5例の内、4例はIMRT施行前に複数回の手術歴があり、3例は口腔癌の症例であった。Grade3以上の有害事象の頻度は急性期粘膜炎を除いて5%未満で、再建に用いられた皮弁に重篤な有害事象は認めなかった。</p> <p>【考察】 3年粗生存率、局所領域制御率は他施設の報告と同程度であった。局所領域再発も他施設の報告と同様に照射野内が多く辺縁再発は少なかったが、複数回の手術歴を有する症例や口腔癌の症例では辺縁再発のリスクを考慮し、照射野を設定すべきと考えられた。</p> <p>【結論】 進行・再発頭頸部癌に対して術後 IMRT は効果的で安全に実施可能であった。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第	号	氏名	大西弘高
<p>[論文題名] Assessment of Clinical Reasoning by Listening to Case Presentations: VSOP Method for Better Feedback</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Journal of Medical Education and Curricular Development, 3, 1-7, 2016</p> <p>著者名 Hiroataka Onishi</p> <p>[要 旨]</p> <p>【研究の目的】多くの臨床教育者は, 症例提示が臨床推論能力の評価に役立つと考えているが, 特異的な評価ツールは確立されていない. 大西 (2008) は症例提示を通じた形成評価や指導をしつつ, 臨床推論能力の評価を行うモデルを提唱したが, 現場での検証がなされていなかった. 本研究の目的は, 症例提示を通じた臨床推論能力評価方法の現場での利用可能性を検証すると共に, 評価手法をさらに改善し, 現場で使いやすいようなモデル化を目指すことである.</p> <p>【方法】佐賀大学医学部附属病院総合外来にて 2009 年 6~7 月に教育目的のべ 84 人の患者に対して 5 年次生 17 名が病歴聴取後症例提示を行い, 10 名の評価者がそれを 1~5 の 5 段階で評価した. 他の類似評価手法と比較検討すると共に, Crossley の現場基盤型評価の妥当性 4 原則に照らしてさらに検討した.</p> <p>【結果】評価尺度を間隔尺度とすれば平均 3.34, 標準偏差 0.73 であった. 各教員の評価平均値間には有意差がみられたが ($p < 0.001$), 各学生の評価平均値間には有意差がなかった ($p = 0.52$). 今後 5 段階の評価尺度は 4 段階の VSOP モデルに変更すべきである. また概念的な妥当性は検証された.</p> <p>【考察】症例提示の評価は一定のばらつきを持ち, 評価尺度としての妥当性があると思われる. VSOP モデルは臨床現場の教育において理解, 利用がしやすいモデルであると考えられる.</p> <p>【結論】VSOP モデルは臨床現場の教育において利用しやすい現場基盤型評価である.</p>				

- 備考 1 論文要旨は, 600字以内にまとめるものとする。
- 2 論文要旨は, 研究の目的, 方法, 結果, 考察, 結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第	号	氏名	中平 圭
<p>[論文題名]</p> <p>Clinical Concentrations of Local Anesthetics Bupivacaine and Lidocaine Differentially Inhibit Human Kir2.x Inward Rectifier K⁺ Channels</p> <p>臨床で使われる濃度の局所麻酔薬ブピバカインとリドカインはヒト内向き整流性 K チャネル Kir2.xを異なる様式で抑制する</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年</p> <p>ANESTHESIA&ANALGESIA Epub Ahead of print DOI:10.1213/ANE.0000000000001158 2016</p> <p>著者名 Kei Nakahira, Kensuke Oshita, Masayuki Itoh, Makoto Takano, Yoshiro Sakaguchi Keiko Ishihara</p> <p>中平 圭、大下 健輔、伊藤 政之、鷹野 誠、坂口 嘉郎、石原 圭子</p> <p>[要 旨]</p> <p>研究の目的; 以前の研究では局所麻酔薬は Kir2 チャネルに影響しないと報告されていた。しかし、その作用は臨床的に局所麻酔で使用される高濃度では調べられていなかった。今回我々は Kir2 チャネルに対するブピバカインとリドカインの臨床で使われる濃度における効果を調べた。</p> <p>方法; HEK293 細胞に発現させた Kir2 チャネルに対するブピバカインとリドカインの作用を、パッチクランプ法を用いて調べた。</p> <p>結果; 全細胞電流の記録中に細胞外液に投与すると、ブピバカインとリドカインはともに電位非依存性に Kir2 電流を抑制した。ブピバカインの抑制はゆっくりで非可逆的であり、リドカインの抑制は速くて可逆的であった。細胞外の pH を低下させて塩基型に対する陽イオン型局所麻酔薬の比率を増加させると、抑制効果は減弱した。また、QX314 を細胞外に投与しても、効果は示さなかった。インサイドアウトパッチ膜からの電流記録を用いて検討したところ、細胞質内のリドカインと QX314 による Kir2.1 の阻害は速く可逆的で、ブピバカインによる阻害はゆっくりで非可逆的であった。</p> <p>考察; 臨床的に用いられる高濃度のブピバカインとリドカインは、ともに素早く細胞内液と平衡化して細胞質側から Kir2 チャネルの機能を異なる様式で抑制することが明らかとなった。</p> <p>結論; 臨床で使われる濃度の局所麻酔薬ブピバカインとリドカインはヒト内向き整流性 K チャネル Kir2.xを異なる様式で抑制している。</p>				

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	染矢 晋佑
<p>[論文題名]</p> <p>Lower Limb Alignment in Patients with a Unilateral Completely Dislocated Hip</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 The Open Orthopaedics Journal. 2016; 10: 448-456.</p> <p>著者名</p> <p>Shinsuke Someya, Motoki Sonohata, Shuya Ide, Satomi Nagamine, Tomonori Tajima, Masaaki Mawatari</p> <p>[要 旨]</p> <p>【研究の目的】 重症化した変形性股関節症が2次性変形性膝関節症を惹起することはよく知られている。しかし、2次性変形性膝関節症の下肢アライメントについてはよく知られていない。今回、高位脱臼股を対象に、下肢アライメントについて検討を行った。</p> <p>【方法】 片側高位脱臼股症例 (Crowe IV) の48股 (48人) を対象とした。48股を新臼蓋形成群 (IVa 群) と、新臼蓋を形成しない殿筋内脱臼群 (IVb 群) とに分類した。IVa 群は脚長差と関節拘縮の両者が存在、IVb 群は脚長差のみが存在する症例群と考えられる。下肢アライメントは、大腿-脛骨角により3群に分けた (内反: 176° 以上、中間位: 170° ~ 175°、外反: 169° 以下)。</p> <p>【結果】 患側外反+健側内反 (windswept deformity) を12.5%に認めた。健側外反 (long leg arthropathy) を6.3%認めたが、全例IVa 群であった。</p> <p>【考察】 脚長差は患側外反+健側内反 (windswept deformity) を惹起する傾向にあるが、健側外反 (long leg arthropathy) は脚長差と関節拘縮の両者が存在する場合に惹起される可能性が示唆された。本研究は後ろ向き研究であるため、そのメカニズムについては今後の研究のつみ重ねが必要である。</p> <p>【結論】 "windswept deformity" はIVa, IVb の両者に存在したが、"long leg arthropathy" はIVa にしか認められなかった。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	古川 尚子
<p>[論文題名] スクリーニングで判明した HBs 抗原陽性者の経過：2008 年 4 月から 2013 年 1 月までの 後方視的観察研究</p> <p>Hepatology Research, 46(7), 678-685, 2016</p> <p>古川尚子、山下秀一、前山恵士郎、大枝 敏、岩根紳治、平井賢治、江口有一郎</p> <p>[要 旨]</p> <p>【目的】本研究は、佐賀県の HBs 抗原の無料検査で陽性が判明した者が精密検査や抗ウイルス治療を受けた割合を明らかにすることを目的とする。</p> <p>【方法】2008 年 4 月～2013 年 1 月に県内医療機関で HBs 抗原検査を受け、陽性が指摘された者が対象者である。県健康増進課のデータベースと精密検査結果報告書から収集したデータを解析した。</p> <p>【結果】無料検査では 193 人が陽性で、男性 105 人 (54%)、平均年齢 55.4±14.9 歳であった。193 人中 147 人 (76%) が精密検査を受け、7 人 (3.6%) が抗ウイルス治療を受けた。精密検査を受けなかった 46 人は、受けた者より若かった(平均 50.9 対 56.9 歳, P = 0.018)。要観察と判定された 110 人のうち、68 人 (62%) は HBV-DNA を測定しておらず、15 人 (14%) は日本肝臓学会のガイドライン 2014 において抗ウイルス治療の適応があった。</p> <p>【考察】精密検査を受けた人の割合は他国の報告より高く、日本の皆保険制度、医療機関での検査であること、行政による受診勧奨が要因と考えられた。抗ウイルス治療を受けた人の割合は他国と同程度であったが、観察群に治療適応者が含まれていることから、更に受療率は上がる余地があると考えた。</p> <p>【結論】HBs 抗原陽性者で精密検査を受けた人の割合は 76%、抗ウイルス治療を受ける人の割合は 3.6%であった。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。